

登録番号 第 10331 号

タチガレン[®]液剤

- 芝（ベントグラス）の赤焼病、カーネーションの立枯病に効果があります。
 特長： ●稲の苗立枯病を的確に防ぎ、根の生育促進、ムレ苗防止など健苗が得られます。
 ●播種時の処理に加えて、育苗中のかん注により移植時の発根及び活着促進が一層的確に発揮されます。

タチガレンは三井化学クロップ&ライフソリューション(株)の登録商標です。

有効成分	ヒドロキシイソキサゾール・・・30.0%	包装	500ml×20
性状	黄褐色液体	有効年限	4年
毒性	普通物 [※]	危険物	-

※普通物：「毒物及び劇物取締法」（厚生労働省）に基づく、特定毒物、毒物、劇物の指定を受けない物質を示す。

【適用病害及び使用方法】

作物名	適用病害虫名/ 使用目的	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用 方法	ヒドロキシイソキサゾールを含む農薬の総使用回数
稲 (箱育苗)	苗立枯病(フザリウム菌) 苗立枯病(ピシウム菌) 根の生育促進 移植時の発根及び活着促進 ムレ苗防止	500～ 1000倍	育苗箱 (30×60×3cm、 使用土壌 約5L)1箱当り 500mL	は種時 又は 発芽後	2回 以内	土壌灌注 又は灌注	3回以内 (移植前の土壌混和は 1回以内、 移植前の土壌灌注及び 灌注は合計2回以内)
	砂壤土、高温、低温又は高密度は種苗における水稲用除草剤起因の生育抑制軽減	500倍		移植5日前 ～移植前日	1回	灌注	
	ごま葉枯病		は種時		土壌灌注		
	苗立枯病(フザリウム菌) 苗立枯病(ピシウム菌) 根の生育促進 移植時の発根及び活着促進 ムレ苗防止	1000倍	育苗箱 (30×60×3cm、 使用土壌 約5L)1箱当り 1L	は種時 又は 発芽後	2回 以内	土壌灌注 又は灌注	
ごま葉枯病		は種時		1回	土壌灌注		
稲(折衷 苗代)	苗立枯病(フザリウム菌) 苗立枯病(ピシウム菌)	500倍	1L/m ²	は種直後 又は 発芽後	2回 以内	土壌灌注 又は灌注	3回以内 (移植前の土壌混和は 1回以内、 移植前の土壌灌注及び 灌注は合計2回以内)
稲(畑苗 代)	苗立枯病(フザリウム菌) 苗立枯病(ピシウム菌)	1000倍	3L/m ²	は種直後 又は 発芽後	2回 以内	土壌灌注 又は灌注	3回以内 (移植前の土壌混和は 1回以内、 移植前の土壌灌注及び 灌注は合計2回以内)
	根の生育促進 移植時の発根及び活着促進			は種 直後	1回	土壌灌注	

作物名	適用病虫害名/ 使用目的	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法	ヒドロキシイソキサゾールを含む農薬の総使用回数
キャベツ	ピシウム腐敗病	1000倍	セル成型育苗トレイ 1箱またはパー ポット1冊 (30×60cm・使 用土壌約3.0 ～4.0L)当り 0.5L	出芽時 ～育苗期	3回 以内	土壌灌注	3回以内
レタス	バーティシリウム萎凋病	1000倍	250mL/株	定植時	1回	株元灌注	1回
すいか	苗立枯病	500～ 1000倍	3L/m ²	は種 直後	1回	苗床灌注	2回以内 (育苗土壌への混和は 1回以内、 苗床への灌注は 1回以内)
きゅうり	苗立枯病(フザリウム菌) 苗立枯病(ピシウム菌)	500～ 1000倍	3L/m ²	は種 直後	3回 以内	土壌灌注	3回以内
メロン	苗立枯病(ピシウム菌)	500倍	3L/m ²	は種時	1回	全面土壌 灌注	1回
ほうれん そう	立枯病	500～ 1000倍	3L/m ²	は種時	1回	土壌灌注	1回
		1500～ 3000倍	9L/m ²			全面散布 後土壌混 和	
		50～100 倍	300mL/m ²				
オクラ	苗立枯病(ピシウム菌)	500～ 1000倍	50～200mL/株	は種時～ 発芽初期	2回 以内	植穴又は 株元灌注	2回以内
さやいん げん	白絹病	500倍	1L/m ²	収穫14日 前まで	3回 以内	土壌灌注	3回以内
さやえん どう	根腐病	500～ 1000倍	3L/m ²	は種後及び 生育期 但し、は種 後1～2か 月後まで	3回 以内	は種穴又 は株元に 土壌灌注	3回以内
実えん どう	立枯病	500倍	200mL/株	は種後及び 生育期 但し、は種 後1～2か 月後まで	3回 以内	は種穴又 は株元に 土壌灌注	3回以内
未成熟そ らまめ	立枯病	500倍	200mL/株	は種後及び 生育期 但し、収穫 30日前ま で	3回 以内	は種穴又 は株元に 土壌灌注	3回以内

作物名	適用病虫害名/ 使用目的	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法	ヒドロキシイソキサゾールを含む農薬の総使用回数
てんさい	苗立枯病	500～ 1000 倍	ペーパーポット 1 冊当たり 1L	は種時～生 育初期 但し、収穫 120 日前ま で	3 回 以内	灌注	5 回以内 (種子粉衣は 1 回以内、 育苗土壌への混和は 1 回以内、 灌注は 3 回以内)
			3L/m ²				
みずな	立枯病	500 倍	3L/m ²	は種時	1 回	土壌灌注	1 回
みぶな	立枯病	1000 倍	3L/m ²	は種時	1 回	土壌灌注	1 回
みつば	根腐病	2000 倍	100～300 L/10a	収穫 14 日 前まで た だし、伏せ 込み栽培は 伏せ込み前 まで	1 回	散布	1 回
いちご	苗の発根促進 活着促進	1000 倍	-	挿し芽 採取時	1 回	30 分間 挿し芽浸 漬	2 回以内 (挿し芽採取時の浸漬 処理は 1 回以内、 挿し芽時の土壌灌注は 1 回以内)
			1. 5L/育苗培養 土 5L	挿し芽時		土壌灌注	
たばこ	舞病	1000 倍	100mL/株	移植時 及び 大土寄時	2 回 以内	株元灌注	2 回以内
カーネーション	立枯病	500 倍	3L/m ²	定植時 及び 活着後	3 回 以内	土壌灌注	3 回以内
アイリス	白絹病	1000～ 2000 倍	3L/m ²	定植時 及び 生育期	6 回 以内	土壌灌注	6 回以内
きく	発根促進	1000 倍	5～10L/m ²	挿し芽直後	1 回	土壌灌注	1 回
林木 (苗木)	立枯病	500～ 1000 倍	3L/m ²	は種覆土 直後	1 回	苗床全面 灌注	1 回
西洋芝 (ベント グラス)	赤焼病	500～ 1000 倍	2L/m ²	発病 初期	4 回 以内	散布	6 回以内
	ヒシム病	250～ 500 倍	0.5L/m ²				

使用上の注意事項

- (1) 使用量が多すぎたり濃度が高すぎた時、場合によっては初期生育が一時抑制されることがあるので、濃度や使用量を誤らないように注意すること。
- (2) 稲に使用する場合は次の事項に注意すること。
 - 1) 育苗中の苗立枯病のまん延防止には発芽期以降に追加灌注すること。

- 2) ムレ苗防止に使用する場合、本剤は育苗中の低温による根の吸水低下や高温による蒸散増加など、吸水と蒸散の不均衡によって起こるムレ苗（生理的な急性萎凋障害）に対して有効であるので、このようなムレ苗の発生する地域で使用すること。
- 3) 砂壌土、高温（最高気温30℃以上）、低温（日平均15℃以下）又は高密度は種苗における水稲用除草剤起因の生育抑制軽減は、除草剤分類（RACコード）2又は15の有効成分を含む水稲用除草剤で効果を確認している。
- (3) 本剤をキャベツに使用する場合は、使用液量が多すぎたり濃度が高すぎると薬害（生育抑制）を生じやすいので、所定の使用液量、濃度を必ず守ること。
- (4) 本剤をオクラに使用する場合は、希釈液を乾燥した土壌に灌注すると薬害（生育抑制）を生じるおそれがあるので、は種前には十分な灌水を行うこと。
- (5) 本剤をカーネーション立枯病防除に使用する場合は、定植時に所定希釈液を1㎡当り3Lの割合でジョロなどで均一に土壌灌注すること。さらに活着後、発生状況に応じて適宜灌注処理を行なうこと。
- (6) アイリスの白絹病防除に使用する場合は定植時に所定濃度の希釈液を1㎡当り3Lの割合でジョロなどで均一に土壌灌注し、その後20～30日間隔で1～2回灌注処理すること。
- (7) さやえんどうの根ぐされ病防除に使用する場合は、発生後の灌注は効果がないので、予防的には播種後1週間以内に所定希釈液を1㎡当り3L灌注し、更に1～2か月後にかけて1～2回株元灌注処理すること。
- (8) 空容器はほ場などに放置せず、適切に処理すること。
- (9) 本剤の使用に当たっては、使用量、使用時期、使用方法を誤らないように注意し、とくに初めて使用する場合には病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

人畜に有毒な農薬については、その旨及び解毒方法

- (1) 本剤は眼に対して刺激性があるので、眼に入らないよう注意すること。眼に入った場合には直ちに水洗し、眼科医の手当を受けること。
- (2) 本剤は皮膚に対して刺激性があるので、薬液調製時及び使用の際は手袋、長ズボン・長袖の作業衣などを着用して、薬剤が皮膚に付着しないよう注意すること。付着した場合には直ちに石けんでよく洗い落とすこと。
- (3) かぶれやすい体質の人は取扱いに十分注意すること。
- (4) 公園等で使用する場合は、使用中及び使用后（少なくとも使用当日）に小児や使用に関係のない者が使用区域に立ち入らないよう縄囲いや立て札を立てるなど配慮し、人畜等に被害を及ぼさないよう注意を払うこと。

水産動植物に有毒な農薬については、その旨

この登録に係る使用方法では該当がない。

引火し、爆発し、又は皮膚を害する等の危険のある農薬については、その旨

通常の使用方法ではその該当がない。

貯蔵上の注意事項

直射日光をさけ、なるべく低温な場所に密栓して保管すること。